ブッダの世界観

ＳＲＫＷブッダ

目次

はじめに……1
世界観と世界像……4
世界観と世界像の関係……8
一般的な世界像の状況……12
この世とは何か……18
世界の根本の法則……24
世界像の再構築の意義……41

近視眼的な世界像……45
達観した世界像……47
必要となる世界像……49
ブッダが世界観を語る意義……52
過去のブッダ達の世界観……59
人生の目的……61
聖求……66
苦……70

超越的存在……72
老いと死の超克……74
言葉……76
功徳……78
信仰と帰依……81
古典的輪廻説……83
輪廻説の取り下げ……86
寂滅論の提起……90

法界……93
諸界……98
諸界の現代的な解釈……101
功徳は現世でのみ積まれる……111
解脱の瞬間……113
善知識の所在……115
覚りの因縁……117
遍歴修行……120

観（＝止観）……123
覚りの素質……126
戒律……128
修行者の妻帯……131
不飲酒（禁酒）……133
道中の不安……135
三毒（貪嗔痴）……140
解脱知見……142

修行の未完成……144
自利と利他……147
使命感……149
魔境……151
善悪の軛……153
仏罰……156
加護……158
一なる道……159

サンガ……161
徳行……163
談論……165
省察……166
明知……168
業（カルマ）……170
異熟の否定……172
仏縁……174

真言（マントラ：咒）……176
仏相……177
説法と仏国土……178
対機……180
ＳＲＫＷブッダの弟子……183
教説の変遷……186
布教……189
梵天勧請……192

辟支佛……194
阿羅漢果……196
離欲……198
神秘体験……199
情け（なさけ）……201
場と道……203
覚りに適した時期……205
現在……207

人生観……210
死生観……212
尊厳……214
中学生の読者に向けて……216
あとがきに代えて……218

はじめに

人は誰でも、しあわせになりたいと思って生きているであろう。ところが、何を手に入れても、何を成し遂げても、真の意味でしあわせになったと満足することはむずかしい。現実問題として、ふとしたことで悩みを生じ、さまざまな苦が襲いかかってくるからである。

では、本当のしあわせに達することはできないのであろうか？

そんなことは無いと、しあわせの境地に達した人は言う。しかも、そのしあわせの境地には基本的には誰もが到達し得るものだと説かれるのである。その境地を、仏教用語でニルヴァーナと呼ぶ。

ただし、漫然と生きているだけではニルヴァーナに到達することはできない。その境地に至るためには、一なる道を歩み、覚らなければならないからである。

ここで、次なる問題を生じるであろう。それは、どうすればその一なる道を見出すことができるかということである。そのために必要になるのが、あり得べき世界観を保有することである。

たとえば、「千万の生涯を経ないとしあわせの境地には到達できない」という世界観を持っている場合、現世でしあわせに達することは最初から諦めてしまうかも知れない。逆に、「比較的容易にしあわせの境地に達することができる」という世界観を保持している人は、希望ある人生を送るだろう。

もちろん、世界観とはこの世界に対する個人的な態度を決める根底のそれのことであり、本来各自がそれぞれに抱くものである。したがって、すべての人々が同じ世界観を抱くなどということはあり得ないことであるのは承知している。それでも、一定の世界観を保有しない限りニルヴァーナに到達し得ないこともまた事実なのである。

そこで、本書ではブッダの世界観を提示するものの、それは演習的に用いるべきことを提案するものである。しあわせの境地に至ることを求める人は、ブッダの世界観を知った上で自分自身の考えや思いに沿って自分自身の世界観を打ち立て、人生に役立てて欲しい。それがあり得べき世界観となったとき、しあわせの境地へと至る道が開けるであろうからである。

さて、読者はしあわせの境地は決して遠い処にあるわけではなく、そこに至るための機縁も身近に出現するものであることを知るであろう。

また、目的地に至るための修行も、決して険しいものでは無く楽しみと栄えと共に歩む道であることを理解するであろう。

真のしあわせを求める人は現世で、つまり生きている間にそれを達成すべきである。そのために必要な基本的な要素は、すべての人が生まれながらに具有しているものだからである。

そこには超越的存在が介在する余地は無く、過去世の因縁を気にする必要も無く、偶然に起こることでも無く、すべて今現在の自分自身の決心次第で歩みを進めることができるものである。

読者が実際にこの究極の目的地に至ったとき、それが虚妄ならざる無上のしあわせであることを知るであろう。同時に、そのしあわせは揺らぐことの無い不滅のものであることも知るであろう。そのとき、読者もまた自らの世界観を世に表明することになるのである。

世界観と世界像

人々は、それを明確に意識しているかどうかはさておき、それぞれの人生観にしたがって生きて行くものである。そして、その人生観を持つに至ったのはつまるところその人が現実に生きている世界における周知された世界観に基本的には随順しているのである。なお、世界観は単一とは限らず、由来する民族や宗教、性差、教育の内容などによってそれぞれカテゴライズされ、あるいは極めて個人的な感性に基づいて形成されることもある。

さて、すべての人は基本的には同じ目的を心に抱いて人生を生きていることは間違いあるまい。それは、幸せになりたいということである。

ここで、全世界の人々が等しく幸せになるべきであるという考えを持つ人と、自分さえ幸せになれれば他の人はどうでもよいという考えを持つ人に大きく分かれるかも知れない。前者は、世界を積極的につくり変えて行くことを旨とし、後者はすでに存在している世界に自分自身が考え得る最高のかたちで適応することを旨とするのであろう。

なお、どちらの人生観を以て生きたとしても最終的に本人が満足すればそれで良いのだとい

う見方もあるだろう。しかしながら、実際にはある人の行動やその結果は他の人々にも影響を与え、その満足を損なうことも少なくないだろう。そして、そのようであっては自分が本当の意味で幸せになれたとは思えないに違いない。要するに、自分が満足するだけでなく他の人々も自分の行為によって満足が損なわれることが無く、その上でそれぞれの人生観に基づき、それぞれの人生を障り無く生きていけるようでなければ幸せに達したとはとても言えないであろう。

このようなことから、そもそもそのような大団円の幸福が実現可能なことなのであるかどうかについて検討しておかなければなるまい。

通常の場合、それぞれの人々の幸福度はそれぞれの人々の活動の結果論にならざるを得ない。そして、それぞれの人々の満足は、各自が保有する世界観や人生観の中においてその達成度が評価されることになろう。逆に言えば、人々が同じ世界観や人生観を保有しない限り少なくともステレオタイプな幸福感の実現は難しいことと言えよう。

もちろん、真社会性生物ならいざ知らず、すべての人々が同じ世界観や人生観を持つ社会など現実としては考えにくいことである。したがって、人々がそれぞれ違う世界観や人生観を持った状態でそれぞれの幸福を追求しなければならないことになる。ただし、人々が一定のレベル

で共通の世界観を保有し得た場合、それぞれの人生観の違いはある限度内に収まるであろうとは期待されよう。そして、それが幸福に直結するものであれば良いわけである。すなわち、多くの人々をより幸福にし得るすぐれた世界観の提唱が求められることになろう。

さて、社会活動の基盤としてのいわば公的な世界観は、その時代の権力者、政治家、思想家、および民衆の理想を元にして形作られるものであり、通常はそれが時間的な改良を伴って築かれていくため、つねに実験的な社会活動の中において歴史が刻まれて行くこととなる。そこで、人々の幸福度が振り返って精査され、長期的に見ればより望ましい世界観の構築へと向かわせることになるに違いない。

ところで、世界観が形成されるときに決定的な役割を果たす土台となるものについても理解しておかなければなるまい。それは、世界像である。これは、

世界は永遠であるのか？

世界に果てはあるのか？

世界はなぜこのような形で存在しているのか？

などと言う根源的な問いに答えるものである。そして、世界像の具体的な要素としては、地図

や宇宙論、気候学、動植物学、医学、薬学、物理学などが挙げられよう。

なお、本書では仏教的な人の覚り（＝解脱）にまつわることがらを主眼として世界像や世界観を述べることにする。何となれば、人の覚りを主眼として構築した世界観こそが、先に述べたすべての人々の大団円の幸福を実現する基礎となるものであると考えられるからである。

世界観と世界像の関係

世界観と世界像には、密接な関係がある。それについて述べたい。

世界像とは、人類のこの世界についての理解に関する構成概念であると言えよう。

世界像の構築は、最初は足下の大地を観察しさらに鳥瞰することから始まったであろう。次いで、世界が大河や海、あるいは山で仕切られており、それらを境として様々な民族や国が存在していることを知ることとなった。ある為政者はそのようにして把握した自国の版図を広げようとし、ある為政者は他の国々と交流・交易することによって知識や利益を得ようとしただろう。そして、それぞれに世界の果てに何があるのかを確かめようとしたに違いない。

時代が下り、地球が巨大な球体を成しているがその地面の面積は有限であり、国の版図争いとはつまるところ土地の奪い合いであるのだと認知するに至った。この時点では海はまだ未知の領域であり、地球世界のおよそ7割を占める広大な航路の領域として用いられた。いくつかの大陸が海で隔てられている以上、船を用いた航海術に長けた国が大陸を跨いだ時代の覇権を握る鍵を得たのは当然の成り行きであろう。そのようにして世界の国々のそれぞれの版図は時

代ごとに一定の落ち着きを見せることとなり、地図の上での世界像は基本的に完成を見たのである。

また、これらの覇業と並行して、知的な探究心に主導された天体の成り立ちの探査と理解、およびその挙動を説明するための物理学が静かに発展した。その結果、地球が宇宙の中心では無くむしろ辺境に存り、それどころか最も近接した天体系である太陽系においてさえ地球は系の中心どころか太陽を周回する数ある惑星の一つに過ぎないことが明らかとなった。

しかしながら、この事実は人類の存在についてのプライドを傷つけるものであり、この世界を闊歩する選ばれた生物としての自負を損なうものとなった。つまり、世界が人類を中心に回っているわけでは無いことを人々は知ったのである。

このため、ある者は世界を席巻する意欲を失い、ある者は自分の個人的な人生活動そのものについてさえその挙動が怪しくなった。人類全体として、まるで糸の切れた凧のようにどこに向かうのかさえ判然としなくなったのである。

すなわち、世界像がより精密に構築されて行くほど人生を組み立てる規範となるべき世界観が皮肉にも揺らぎ、曖昧になり、地域によっては混迷を極める事態を誘発した。ある者は、自

己の確立に際して何に頼ってよいか分からなくなり、ある者は復古主義的な古い思想に歪んだ固執と共に埋没し、人の尊厳を踏みにじる自分勝手な主義の風潮が蔓延り、果ては命を軽んじる輩まで出没するに至った。

この世の現実を知るにつれ、夢も希望も無いという無力感に苛まれ、焦燥を攻撃的な形でしか表明出来なくなってしまう現象も見られた。それは人や文化や国を損なう愚行となり、その結果さらに夢も希望も無くなるという悪循環に陥ることとなった。

国や民族や文化の違いによって多少の差異があるとしても、現在の世界の様相は基本的にはこのような楽観できない状況なのである。

しかしながら、打開の道は存在している。人々があり得べき正しい世界観を持つならば、各自が自分自身によってしあわせの境地に至ると期待され得るからである。そのしあわせの境地を、仏教世界観ではニルヴァーナと呼んでいる。

ニルヴァーナの詳細については他書に譲るが、要するにこれは人がこの世で到達可能な最上の楽しみの境地であると知られるものである。そこに至る道を仏道と呼び、多くの仏教経典がその道についての詳細を説いている。また、それぞれの経典には正法の記述があるが、正しい

世界観を持つ人が機縁を生じたとき、この正法の通りにニルヴァーナへと到達することになるのである。

ここで、正しい世界像があってこそ人々はあり得べき世界観を持つことができ得ると考えられよう。そこで、本書は先ずそのために必要となる世界像を提起し、その上でブッダがこの世をどのように見ているのかという世界観を述べることにする。

以下略